

医療の最前線で 人の命を救うデザインのカ

大阪大学
大学院工学研究科 教授
川崎 和男 先生

医師自身が使うのを 嫌がっていたトリアージ

例えば大地震が起こり被災地にたくさんの負傷者が出たとします。彼らはみな少しでも早い治療を待っています。とはいえ、手当てにあたる医師や薬、病院の数には限りがありますから、病院へ運ぶのに優先順位を付けなければなりません。

そこで使われるのが「トリアージ・タグ」です。緑、黄、赤、黒の4段階を表すことができ、それぞれ軽処置、非緊急治療、最優先治療、死亡及び不処置を意味します。現場で医師が負傷者に付けていき、救急隊員は色で病院に搬送する順番を判断するのです。日本では阪神大震災をきっかけにJR福知山線の重大事故や秋葉原の殺傷事件で使われました。

ところがこのトリアージ、現場で働く医師にとってはとても使いにくいと不評でした。黄色か、赤かで結果に大きな差が出るからです。仮に黄色を付けたために治療が遅れ、万が一、その負傷者が亡くなると、医師は責任を問われ、訴えられることもあるのです。

本質は一人でも 多くの命を助けること

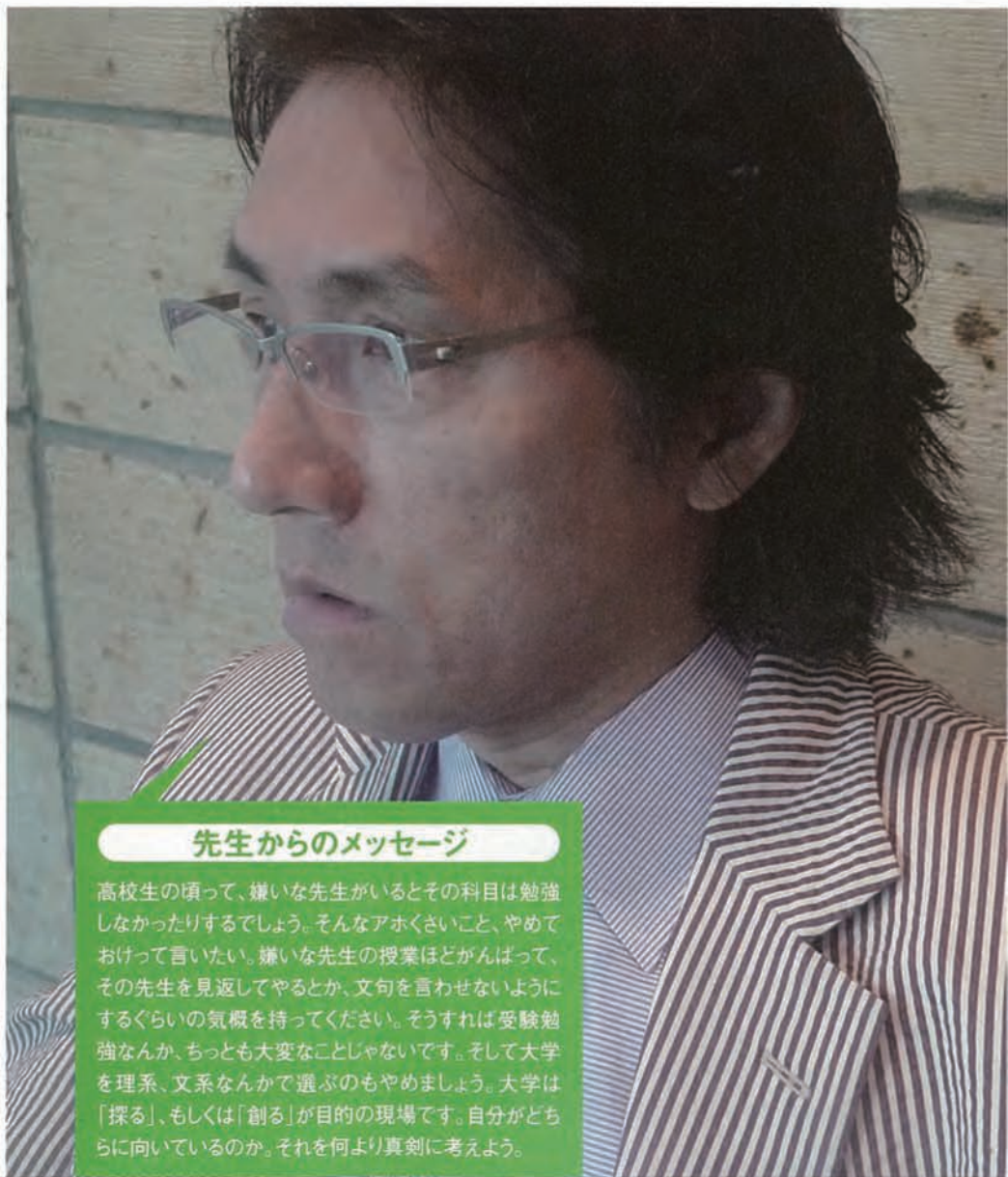
そもそもトリアージは、何のために存在するのでしょうか。それは、人の命を救うためです。4種類もあるから迷うのです。

トリアージの研究では、現場での判断について多くの論文が書かれています。それだけ判断が難しいのです。それなら緑・赤・黒の3段階にして「運ぶ」「運ばない」に割り切ってしまうえばよい。これがデザインによる解決の本質的な手法です。

さらに現状のトリアージは、形や大きさが荷札とそっくりです。誰がどう見ても宅急便の荷札にしか見えません。なぜ、こんなデザインになるのかと言えば、人命救助のツールという発想が抜けているからでしょう。デザインとは単に形や色などのうわべだけを



取り繕うものではありません。なぜ、それが必要なのか、その役割は何か、どう使われるのか、本質的な部分を徹底的に追求するのがデザインです。だから医学の分野でこそデザインが最も必要な支援手法なのです。



先生からのメッセージ

高校生の頃って、嫌いな先生がいるとその科目は勉強しなかつたりするでしょう。そんなアホくさいこと、やめておけて言いたい。嫌いな先生の授業ほどがんばって、その先生を見返してやるとか、文句を言わせないようにするぐらいの気概を持ってください。そうすれば受験勉強なんか、ちっとも大変なことじゃないです。そして大学を理系、文系なんかで選ぶのもやめましょう。大学は「探る」、もしくは「創る」が目的の現場です。自分がどちらに向いているのか。それを何より真剣に考えよう。